指

annmin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
指

【Ｎコード】
Ｎ９０７６Ｍ

【作者名】
ａｎｎｍｉｎ

【あらすじ】
いきなり現れた、小指に包帯を巻いた女性。
彼女が手を伸ばしてきた時、彼もまた手を伸ばす。
そして―自分の指が１本足りない事に気付く。
幸い、指はすぐに“復活”するが……
それから彼は、周辺に“指が１本無い”人間を見かけるようになってしまう。
そして、その度に小指に包帯を巻いた女性が現れる。

「いた」
「見た」
「誰」

質問とも命令とも取れない問い。
彼は逆らえず、それに答えてしまう。
そして……名前を答えた“指が１本無い”人間は
姿を消してしまう。

彼のその独白を、私は聞いていた。

「あれは、４年前になりますか。
正確には４年前から、と言った方がいいのでしょうが。
……いや、その、ちょっと聞いて頂けますか？」

考えながらだろうか、それとも説明の仕方に頭を
悩ませているのだろうか―
“ここ”はそうした人が来る場所。

年齢は２０代後半に見える。
少し太り気味といった印象だが、彼にどのような
“ここに来る理由”があるのだろうか―

しばらく視線を畳とこちらの間に泳がせていたが、
やがて意を決したように口を開いた。

ここからは、彼が実際に体験したという回想になる。

その時、彼は最寄の駅を降りて、自宅への道を
歩いていた。
いつもの街灯に、いつもの自販機の光。
たまに酔っ払いが騒いでいたり寝ていたりする事も
あったが―

「アレはそうじゃありませんでした」

彼のアパート、2階の自室へと続く階段の下。
何かがうずくまっていた。

動物じゃない、子供じゃない、近付くにつれて選択肢が減っていって、それが大人の女性だと気付いた時には、もう目の前にいた。

「どうかしましたか？」

白い着物を着ていた……という事はなく、普通のリクルートスーツのような格好。
とにかく、階段を上がらなければ部屋に戻れない。
単に気分が悪いだけなら、適当に介抱するか救急車を呼ぶなりしようと考えていると、

「こう、すっと片手をこちらに伸ばしてきたんです」

指先―当然それが目に入るのだが、その異様さにすぐ気付いた。
若い女性らしい、白く細い指。
しかし、1本だけ違っている。
小指に当たるそれは包帯で巻かれていた。

普通なら「ケガでも？」と聞くところなのだが、なぜかこちらも手を伸ばした。
そうするのが当然、自然とでもいうように。

「……ひっ」

息を飲み、手を引っ込める。
驚いた理由は彼女ではない。
自分だ。
自分の右手、それが視界に入った時、異常に

気付いたのだ。

「小指が無かったんですよ」

慌てて自分の無くなった小指を握る。
一方の手で隠すかのように。
……ある。
物体としての感触が、そして温度が包んだ指と
手の平に伝わってきた。
そしておそるおそる開いてみると……

あった。
ちゃんと5本の指が見える。
両の手の、合わせて１０本の指を手の平を自分へ
向けて、何度も確認する。

「いったい……」

と、両手から顔を上げると、すでに女性の姿は
無かった。
むき出しの鉄で出来た階段が、風にうたれて
鳴っていた。

気が付くと、すでに朝だった。
布団の中で天井を見上げ、自分の状態を確認する。
スーツやYシャツは一応脱いで寝たようだ。

「……何だったんだよ、もう」

洗面台へと向かい、顔を洗う。

ふと、右手に視線が向かう。
……あった。
当然だ。あって当たり前なのだ。

「まぁ、その時までは奇妙な夢でも見たんだろうって」

気のせいと思うと同時に、自分を納得させる。
ただでさえ朝の時間は短い。
入社してからまだ日の浅い彼に、遅刻する度胸など
なく、出社してからしばらくすると、その忙しさから
昨夜の出来事は完全に頭から抜け落ちてしまった。

昼になると、それぞれが思い思いの場所へ向かう。
社食、定食屋、コンビニ。
彼は社食で食事は取らない。
いつも1人で、外食かコンビニへ行くのだが—
それは一応上司に報告してから行く事になっていた。

「うぁぅ」

小さく、うめき声が出た。
その先には彼の上司が書類を縦にして高さをそろえて
いる。
そして昨夜の事が夢ではないと記憶が告げた。

「あ、食事ね。ん、行っといで」

流れ作業のように、ろくに確認も取らずに書類と
格闘する３０代後半の上司。
その彼の右手には—“なかった”。

「今思えば、それが皮切りでしたねえ」

彼の指はすぐに“復活”した。
しかし、上司の指は昼休みを過ぎようとも、
定時になり仕事の終わりを報告する時になっても、
無くなったままだった。

話そうかとも思ったが、説明したところで解決方法は
無いどころか、理解してもらえるかどうか。
自分にだってそれが何なのかわかっていない。
それに終業時間まで普通に仕事をしている事が、
早急に介入する意志を失わせた。

帰りの電車に乗り、自宅の最寄の駅に降りた彼の
口から、自然とため息が出た。

「疲れてるのかな」

確かに仕事が忙しいとはいえ、世間で言われるブラック
会社のように追い詰められている事はない。
一部の指が無くなって見える精神的な病などあるの
だろうか、帰ってからネットで調べてみるか―
そう視線を落としながら足を進めていた。

視界に入ってきたものがあった。
靴。その造形と細さから女性だという事がわかる。

「……？」

立ちふさがるようにして彼女は立っていた。
顔を上げていくにつれて、スカート、上着、どれもが
闇に映える紺で統一されたリクルートスーツ。
あの包帯で小指が巻かれた手が見えた。

そして、肩を少し過ぎたくらいに伸ばされた
セミロングの髪、その始発点となる顔。
年齢は２０歳前後だろうか―
線のように細い目がゆっくりと開かれ、血でも塗った
かのような唇が開く。

「いた」

―何が？
わかっているのは、彼女は聞いてはいない。
ただ、“いた”と言ってきた。

「見た」

―わからない。
彼女が何を言っているのか。
しかし、それ以上にわからないのが、自分がコクコクと
彼女の言葉に反応し、うなづいている事だった。

「誰」

勝手に口が開いた。
出てきたのは、会社の上司の名前だった。
あの、自分と同じく指が消えた―

「わかった」

それだけ言うと、女性は自分の横を通り過ぎた。
女性が視界から消えた途端、温度が戻ってきたかのように、汗が一気に吹き出る。

あれは何なのか。
やはり消えた指に関係があるものなのか。
上司の名前を出してしまったが、報せるべきだろうか。

とにかく家にいったん帰ってから—
玄関を開けて室内に入ると、また布団の中で
朝までの時間が消えていた。

「それから？
普通に会社行って……あの上司も普通に仕事してて。
相変わらず指は４本しかありませんでしたけど。
気にしない事にしたんです。
したってどうしようもないですし」

１ヶ月ほどが過ぎた。
指以外はどうという事もなく、意識的に無視しなくても良いようになってきた。
結局、何でも無い事なんだ—
そう自分が納得し掛けた頃。

会社の、あの上司が休んだ。

代理が来たが、休んだ理由については教えてくれなかった。

その上司はその日以来見ていない。
借金があり、その穴埋めに会社の金を横領していた、
との噂も流れたが、そのどれもが無責任な噂として
周囲は本気にしなかった。
もっとも、それほどの付き合いが無かったからかも
知れないが。

「でも、それからね」

今までに、上司以外に3人ほど指が4本しかない人を
見たという。
だいたい、1年に1人か2人のペース。
1人は、ウェイトレスの女の子だった。

「行き付けの定食屋の店員で、ちょっと気になってた
子だったんだけどね……
メニューを持ってきてもらった時に」

気付いてしまったという。
そして名前まで知ってしまっていた。
名札を見て、覚えてしまっていた。

その夜、再びあの“彼女”が姿を現した。
紺の、長袖のリクルートスーツ。

「いた」

―前の事もあり、あのウェイトレスの子の事を
言っているのだろうと理解はしていた。

「見た」

―とは指か、その人か。
それから続く言葉が記憶に蘇り、血の気が引く。

「誰」

そして、その子の名前を答えるのと同時に、罪悪感と後悔が背骨を駆け上がっていった。

「わかった」

女性はそれだけ言うと、無表情で横を通り過ぎた。
振り返りたく無かった。
そのままアパートの自室に転がり込むと、布団を頭から被った。

1ヵ月後、行き付けの定食屋からその子が姿を消した。
他のウェイトレスの子から事情を聞こうにも、無理強いしてまで聞く理由は無い。
しかし、彼はどうしても理由を知りたかった。
あの指とは無関係だと証明したかったのかもしれない。

警察じゃないでしょうね？　といぶかしがるその店員に彼はレシートと一緒に1万円札を渡した。
目を丸くして驚いていたが、彼女はそれを受け取った。
次に来る時に話してくれればいい―
そう思って渡したのだが、店を出た後彼女が追い掛けてきた。

「お客さん、忘れ物です」

営業スマイルと共にやってきた彼女は、彼に店のチラシを渡すと話し始めた。

「あの子ね、ああ見えて男関係が激しかったみたい。それ絡みのトラブルがあって、実家に戻されたって店長が言ってた。アタシが知っているのはこれくらい。これでいい？」

それだけ言うと、また営業スマイルに戻り

「ありがとうございましたー、またのご来店をお待ちしています」

と言って彼女は店へと戻っていった。

「その２人は……まあ言っちゃ何ですけど、結局原因はその人自身にあったわけで。後の２人も似たようなものでしたけど」

その中に、幼馴染がいたのが一番辛かったですね、そう彼はうめいた。

―私は寺の本堂で話を聞いていた。若い頃に少し仏道修行をし、今は在家だが時折相談に乗る事がある。

「４人、ですか。しかし―その小指を包帯で巻いた女性はいったい？」

「わかりません。
会おうとも思いません」

彼は首を左右に振った。
指が一本無い人を見つける—すると彼女が現れる。
そして、自分がその人の名を答えてしまう。
その人は1ヶ月ほどで姿を消してしまう。
例外無く—

「4年経って、どうしてお話をしようと思ったんですか？」

「誰かに話して、少しは楽になりたかったのか、
罪悪感を薄めたかったのか……
おかげで、ちょっと肩の荷が下りたような気がします」

彼は語り終えると頭を下げ、いくらかの寄進を渡して寺を出て行った。

「気に入らない」

隣りの部屋で話を聞いていたであろう、師にあたる人が入ってきた。

「何がです？」

「罪悪感がどうってなぁ、話聞いてみればどれもこれも“悪さ”背負っているヤツばかりじゃないか」

それはそうかも知れないが、気弱な人なら―
そう口を挟もうとするが、師は話を続ける。

「それにな、名前を知っているのがどうもカギになっているようだが、何でその“指の無いヤツ”の名前をいつも知ってる？」

「それは、上司とか、気に入っている子とか―」

「４人全員か？　例外はいなかったのか？」

―不自然、という事を言いたいらしい。
言われてみれば、である。
例外をあえて言わない―それもまた不自然だ。

「でも、４本指というのは何でしょう？」

「鬼だ」

明確に答えが返ってきた。

「人間の５本の指は、３つの罪悪と２つの美徳で成り立っている。
“知恵”と“慈悲”が美徳だが、鬼には“慈悲”が無い」

だから“４本指”なのだという。

「あの、小指を包帯で巻いた女性は―」

「多分“言触れ”の一種だと思う」
吉凶や神託を前もって知らせる“者”。
ただ、妖や神の類ではなく、その役割を負っている生身の人間だという。
「包帯の意味は？」
「“鬼”に気付かれるからだろう」
話を聞くに、指は見えなくなるだけで“ある”。
彼は自分の指が無くなった事に気付いた。
そして、他人の“それ”も見る事が出来る。
「その包帯の女性も鬼だと？」
「近くはなるんだろうよ。
４人が姿を消したのと無関係とは思えんし」
ふーむ、と納得し理解しようと努めていると、
「本当にニブイな。
まだ気付かないのか？」
「え？」
師はボリボリと頭をかきながら、ため息をつく。
「よく話の中身を整理しろ。

一番近くで聞いてたんだろ。
まず彼は４人とも、“偶然”にも名前を知っていた」

「はい」

「４人とも消えた指は“復活”していない。
復活したのは彼だけだ」

「……はい」

「その怪しげな包帯の女性にストレートに、何度も
会っているのに、彼だけは無事」

「それは、すでに“４本指”ではなくなったから」

と言いかけて、口の中の息が肺に戻った。
やっと気付いたか、という師の視線に押されるように。

「そういうこった。
その“言触れ”が何の理由で“鬼”を探しているか
知らんが、効率ってモンがあるだろう」

“鬼”には“鬼”が見えるのだとしたら―

「自分１人じゃ限界もあるし、それなら最初に見つけた
１匹を見逃す代わりに、自分以外の鬼を差し出せ、と」

「言触れか、鬼か、どちらが先に取引を持ちかけたか、
そこまでは知りようも無いがな。
しかし、自分を見逃してもらう代わりに身内でも他人

でも売り続けているとしたら―
そいつは、“鬼の中の鬼”だ」

今度はこちらが頭をかきながら、いつ気付いたんですか？　と師に尋ねた。

「頭を下げて帰った時だ。
普通なら、“どうしたらいいでしょうか”とか解決策を聞くもんだが、それが無かった」

つまり―続けるつもりなのだ、彼は。

「罪悪感うんぬんってのは本当だろう。
だが、鬼とはいえお仲間を売っちまっているんだ。
もう元には戻らんだろうな」

彼の出て行った境内を見ると、すでに宵闇の幕が降り始めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9076m/

指

2010年10月17日16時59分発行